三身ニ於ニ諸教中一秘レ之不レ伝」の引用が見られ、この説を根拠として久成の三身を三世常住と規定されたものと推測できる。また、聖人は信仰的事実によって、三世に亘る釈尊の生命と教化とを観取せられ、釈尊の寿命に断絶はなく、もし断絶があっては寿量本仏たり得ないとして、無始無終の概念を付与されたものと考えるのである。

さて、次に『開目抄』（定遺五七六頁）には、発迹顕本の文を引用して、久遠の釈尊が十方分身諸仏の能統一者であることが説かれる。ここで注目されることは、「此過去常」という表現であるが、「この」という指示代名詞は発迹顕本をさし、五百塵点劫は過去常と同義であることがわかる。過去常とは過去常住であり、寿量品ではこの過去常住に托して三世常住が開顕されたと見るべきであって、五百塵点劫は過去常住と同時に、三世常住、無限をも意味するものであろう。

この『開目抄』では、釈尊と諸仏との関係が明らかにされるだけでなく、依報たる国土の問題が述べられ、釈尊が三世常住であれば、依報たる娑婆は本土となり、常住浄土であることが明記されている。これは『観心本尊抄』の「今本時娑婆世界離ニ三災一出ニ四劫一常住浄土」（定遺七一二頁）と同致をなすものである。

以上、『開目抄』を中心に顕本の問題を考察したが、ここで指摘できることは、五百塵点劫とは久遠無始であり、過去常住を正意とするが、この過去常を媒介として三世常住が顕わされているということ。しかもその三世常住とは釈尊の寿命を指し、その仏格は三身円満具足の無始無終なのである。つまり、釈尊の無断絶の寿命と救済活動とが五百塵点劫の譬喩をもって示され、そこに永遠性と絶対性とがあると言える。そして、我等衆生は必然的にこの釈尊と関わり、己心に内在する仏格はこの釈尊にほかならない。それ故に、『観心本尊抄』に発迹顕本の文を引いて、「我等己心釈尊五百塵点乃至所顕三身無始古仏也」と定められたものと考えられる。

吉田松陰と日蓮聖人

石川教張

幕末の思想家・吉田松陰は（一八三〇～五九）、自ら二十一回猛士と称し教育および規諫の実行に献身、三十年の短かくも波瀾に富んだ一生を救国の大義に殉じた。

松陰のめざした至誠の志の種蒔きと諫幕から倒幕に至る世直しの苦難にみちた行動は、「草莽崛起」と呼ばれる名もなき庶民の決起実践を究極の到達点とした。

草莽崛起とは、救世愛民をめざし山積する国家の危急存亡の問題を解決するために庶民が立上ることであり、「上を損じて下を益す」（「獄舎問答」）民衆的自覚をさしている。

安政六年（一八五九）四月、松陰は野山獄より岩倉獄中の門弟野村和作宛に書簡を送った。そこには、草莽崛起の策を実行する決意が宣言され、しかも草莽崛起の策が日蓮聖人の信仰実践より思いついた事実が表白されていた。

此の道至大、餓死・諫死・縊死・誅死皆妙、邵きて一生を偸む亦妙。一死実に難し。然れども生を偸むの更に難きに如かざる事初めて悟れり。実に草莽の案なり。・定下云く「往先崛起の人有か無かを考て見ねばならぬ云々」、是は勢をを計り時を観るの論なり。時勢こそとまれかくまれ、義卿が崛起の人なり。……

余が策の鼻を云ふが、日蓮鎌倉の盛時に当て能く其道天下に弘む。北条時頼、彼の髪を制すること能はず。実行刻苦尊信すべし、爰じや爰じや。

この書簡は(イ)京中心に安政大獄を断行する老中間部詮勝要撃策の挫折と松陰自身の野山獄再入獄(ロ)高杉・久坂等門弟同志の時勢観望論に対する憤激失望と彼らとの絶交による孤立、(ハ)伏見要駕策の失敗とその決行を託した野村和作の岩倉下獄、という状況の中で執筆された。松陰は、「恐れ乍ら天朝も幕府・吾藩も入らぬ、只六尺の微軀が入用」と語り、「義卿随分自ら頼む所なきに非ず」と表明しつつ「崛起の人」としての志を貫き通す死生観に開悟した。「崛起の人」すなわち草莽の志士とは、「敢死の士・智勇義侠の士」「小吏無役の輩・罪謫を蒙る正義の人、下賤に埋没する者」「禍福死生すでにその念を絶ち大節大義を天下後世に建明せんと欲する者ども」のことである。特に上書諫言を実行して罪謫を蒙った民間の志篤き人を「草莽崛起の英雄」とみなした。

こうした松陰の草莽崛起に対する確信が、日蓮聖人との出会いによってもたらされた事実は、さきの書簡の示す所である。すなわち第一に草莽崛起の策を思いついた「著眼」の端緒が日蓮聖人の仏道実践にあったこと、第二に「鎌倉の盛時に当て能く其道天下に弘む」と指摘した日蓮聖人による法華経の弘教と北条時頼への立正安国

の諫暁を草莽崛起の先駆とみなしたこと、第三に北条時頼（覇道）に制圧されることなく仏道を天下に弘布した「実行刻苦」を「尊信」し、これを草莽崛起にとっての肝心な点と述べ「崛起の人」の先覚者として日蓮聖人をとらえていること等を、この書簡は物語っている。

ところで松陰は、神明を尊崇する孔孟の使徒の立場から、しばしば仏教を論じ「仏と申すものは、信仰するに及ばぬ事なり」と指摘し、聖賢の道に叶う限り「目前の工夫」として仏教及び仏者の見解を評価してきた。唖の弟敏三郎のために清正公へ平愈を祈禱したこともあり、法華経を読み普門品を実感的に把握し観音力や釈迦の出世法について言及、不死をめざして一心不乱に自らの身を行ずることの大切さを主張した（妹千代宛書簡）。また叔父竹院和尚の教導激励をうけ、江戸伝馬町の牢では法華僧日命から四恩説を聞き、海防僧・月性とは憂国慷慨の念と反幕論をたたかわせて親交を結び、不面心交の友黙寐からは討幕論の影響を強くうけ至誠による諫幕の立場を追求してもきた。さらに次のように語ったこともある。

「夫れ衆生済度の為めの草鞋掛の苦労は親鸞猶能く憚らず、外道摂服の為めの斬首遠流日蓮能く畏れず。彼れ皆異端邪説、聖人の徒の歯せざる所にして、彼れが如し」（講孟余話）。安政六年、崛起の人として生を貫くことを悟った松陰は、「仏法信仰はよい事ぢゃが、仏法にまよわぬ様に」と述べながら大義至誠の道を「身で行ふ」ことを吐露し、日蓮聖人の実行刻苦を尊信受容するに至った。ここで言う実行刻苦とは、立正安国の諫暁から伊豆流謫までをさし、衆生済度のための「外道摂服」「斬首遠流」を含む身命を惜しまぬ不屈な済世のための信仰実践を意味している。「堅氷鬚に在り、凝陰膚に透る」野山獄中にあった松陰が孤高の煩悶と至誠貫徹との葛藤の彼方にまみえたものは、下賤の身を起して勇猛・不退転に仏道を天下に弘め、諫暁に立上り罪謫を蒙った日蓮聖人の志と実行刻苦の姿に他ならなかった。松陰は、「至情を蘊み情の迫る」共感の念をこめて日蓮聖人を尊信し草莽崛起の実行を宣言したのである。